HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中国における文化大革命期の体育思想とサッカー : 持続と変容をめぐって [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	李, 晋寧
Citation	北海道大学. 博士(教育学) 甲第15802号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92371
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	LI_Jinning_abstract.pdf (論文内容の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）　　氏名：李　晋寧

学位論文題名

中国における文化大革命期の体育思想とサッカー

―持続と変容をめぐって―

本研究は文化大革命期（以下では文革期と略す）の政治思想が生み出した体育思想とサッカーの関係に着目し、1980 年以降に至るまでのその影響力の持続と変容の問題を歴史的に明らかにすることを目的とした。

上記の問題を扱う際、同時代史料の欠如が指摘されている。また、通史や外交関係の問題を扱った文革期の体育・スポーツ史研究は存在しているが、サッカーについて詳細に論じる研究はこれまで殆どなされていない。しかも、既存の研究が扱う史料は官報や権威的文書に依拠し、民衆の視点を有するリソースも十分でなかった。また、女子サッカーに関する研究は存在しても、文革期の男女同権思想に論及したものは乏しい。また、中国サッカーの発展の遅れは西欧由来のスポーツの文化的土壌の欠如に起因したという指摘はなされているが、文革期のサッカー文化の実態は不明なままであった。そこで、本研究ではスポーツ雑誌、新聞報道、選手やファンが残した日記や回顧録を渉猟し、先行研究が欠いてきた視点を補うことを試みた。なかでも、史料的欠如の問題を補完する上で、フランスの歴史学者、ピエール・ノラによる「記憶の場」という方法論に依拠し、文革期の体育思想とサッカーの関係性を明晰にすることを試みた。

本論文は第一部と第二部から成る。「第一部　文化大革命期のサッカーと政治思想」は第一章から第三章までの三章から成り、文化大革命の到来と変革によりサッカーに生じた変容を克明にした。すわなち、第一章は『体育文件選編』と『中国サッカー運動史』を基に文化大革命期以前の中国におけるスポーツシステム及びサッ

カーの発展状態について論じた。この時期の中国のスポーツは国家防衛を主な目的とし、ナショナリズムとも結びついていた。しかし、毛沢東による大躍進政策により、中国における西欧起源のスポーツの発展、サッカーの発展は停滞した。この状況は緩和され、体育管理部門は 1964 年に新たなサッカーの発展方針を公表したが、２年後に始まった文化大革命の変革により、同方針は頓挫した。

第二章では、中国の作家、劉斉が書いた『球迷日記（サッカーファンの日記)』（1964-1998）に基づき、文革期の政治とサッカーについて、人民の視点から論じた。この時期の中国におけるサッカーチームは解散させられ、組織的なサッカー試合は中止を余儀なくされていた。しかし、同日記は、人々の観戦を伴うサッカー試合への参加機会は減少したが、自発的な試合は組織され、観戦もしていたと記されており、完全にサッカーと絶縁していたわけではなかった側面を映し出していた。また、著者の劉斉は「上山下郷」の生活に耐え兼ね、風刺画を挿入し、サッカーは「憂いを癒す」手段であったと表現していた。それゆえ、同日記の内容から、文革期はサッカーに政治的影響及ぼすと同時に、サッカーが憂いを癒すための活路として期待されたことについても論じた。また、文革期の政治思想や政治用語と無理にスポーツを結びつけることにおいて人々には苦悩があり、人々は純粋に競技を楽しみたいと考えるサッカー文化の需要があったことも日記から明らかになった。つまり、文革期に社会主義的な体育価値観として確立された「友好第一、競技第二」の思想と精神はサッカー活動の現実とは結合できず、サッカーの発展の抑圧に繋がっていた。

第三章は 1980 年に公刊された『体育報』に掲載された「友好第一」思想に対する議論と疑義に着目し、文化大革命期に体育価値観であった「友好第一」思想の歴史的効用の持続力と変容について分析を行った。社会主義思想の下で体育的価値観の「友好第一」を信奉した人々は、スポーツは政治の為のもの、外交の手段の一つと理解し、革命期以後も深く影響された。しかし、「友好第一」思想は双方の真剣勝負の戦いである競技スポーツを阻害するという考えが 1980 年代以降に公にされるようになる。つまり、「友好第一」思想は社会主義的体育思想のもとで統合がはかられ、1980 年代に至ってもその影響力を持続したが、文革期とは異なり、中国人民の体育的価値観は解体され、『体育報』の中において伝統的な考え方に修正を迫る主張も示されるようになったことが明らかになった。

「第二部　抵抗とオルタナティヴ」は第四章と第五章の二つの章から成る。第四章では体育雑誌である『新体育』、サッカー誌である『サッカー世界』に着眼し、女子サッカーを通じて、文革期の政治思想に対する抵抗の姿を明らかにした。つまり、中国の女子サッカーが 1979 年以降に普及したのは、文革期が終焉を迎え、改革開放政策の時代が到来し、中国スポーツは新たな時代を迎え、国際的な競技スポーツの発展という外圧を受けて、エリートスポーツが再び重視されるようになったことに起因していた。それゆえ、文革期以後に生まれた中国における女子サッカーの誕生は古い観念に対するひとつの抵抗の産物として炙り出された。それは男子サッカーよりも新たな時代を象徴する事象であったと言える。

第五章では、ノラによる「記憶の場」に依拠し、文化大革命期を回顧して叙述された自叙伝とサッカー専門雑誌、『サッカー世界』(1980-1989)にみる記憶の歴史を扱い、文革期における個人や集団の記憶を通して、政治思想とサッカーの関係について分析した。結果、文革期におけるサッカー従事者はサッカーから離れ、勤務を中止せざるを得なくなり、心に傷を負ったと記憶されていたことが明らかになった。これらの回顧録は、政治的な審問に怯え、生活不安に耐えられなくなり、自殺した人物もあったことも伝えていた。そして、文革期を 1980 年代に回顧したサッカー関係者は文革期の階級闘争の影響を「負の遺産」と捉える集団記憶を抱いたことが明らかになった。

総じて言えば、1960 年代の日記に象徴された苦悩、1980 年代に至っても根強い道徳規範であり続けた「友好第一」思想、1980 年代にみられた体育思想に対する批判が織り交ざる形で、文革期のサッカーと思想に対する否定が醸成されたということができる。また、古い思想に対する抵抗は、男子よりも女子サッカーを通じて、新たなパースペクティブを構築した。

なお、文革期の体育思想とサッカーの「遊戯性」の観点からも考察すると、文革期のサッカーは、競技性と娯楽機能が重視されず、スポーツの遊戯的本質から乖離した政治的効用を意図した体育活動に過ぎなかったと言える。よって、文革期にサッカーから受容できる民主的な精神文化が抑圧されたことは、遊戯論を基盤とするサッカーの発展の醸成が遅れた原因の一部であったと結論づけられる。